

# *Saṅs rgyas gtso boḥi rgya cher ḥgrel pa*

—解説および和訳—

袴 谷 憲 昭

## 解 説

ここに紹介する *Saṅs rgyas gtso boḥi rgya cher ḥgrel pa*<sup>1)</sup> (STsG, 『最勝なる仏に関する詳解』) は、チベット仏教初期伝播時代 (*śna dar*) の大翻訳官 Ye śes sde の著作として伝えられる小篇である。以下、この小篇を紹介するために必要な事項を選び、簡単な解説を試みたい。

著者 STsG の著者 Ye śes sde<sup>2)</sup> が、八世紀後半より急速に進展したチベットの仏典翻訳事業において、Jinamitra, Śilendrabodhi などと共に、質量とも龍大な仏典の翻訳に参画した重要な人物であったことは、目録等<sup>3)</sup> において夙に知られるところである。彼は、インド側仏教の最初の本格的導入者である Śān-tarakṣita の弟子といわれ、Kamalaśīla とほぼ同時代の後輩と推定されている<sup>4)</sup>。その彼が自ら著作したのものとして現チベット大蔵経に収録されているものは、当の STsG を含め三点を数える<sup>5)</sup>。いずれも小品ながら、当時のチベット仏教の実状を直接見聞したものの記録として極めて重要なものである。事実、彼の著作の一つである *lTa baḥi khyad par* (TKh, 『見解の区別』) は、かような意味

- 1) P版, No. 5848, Cho, 269b<sup>7</sup>—274a<sup>1</sup>: D版, No. 4361, Jo, 228b<sup>1</sup>—231b<sup>6</sup>。冒頭には *Saṅs rgyas gtso boḥi rgya cher ḥgrel pa* なる題名が掲げられるが、結尾には “*Saṅs rgyas gtso boḥi ṭi kā rgya cher ḥgrel pa bod kyi lo tsā ba Shaṅ Ye śes sdes mdsad pa rdsogs so ||*” とあり、題名中に *ṭi kā* なるサンスクリット音写が加えられている。題名の意味については後に言及す。
- 2) 通常この名称に Shaṅ が冠される。上註所引の colophon 参照。Shaṅ が具体的になにを表わすか筆者未詳。
- 3) 東北および大谷目録の別冊あるいは巻末の索引によって、容易に彼の訳出仏典を検索できるが、さらに便利なものとして、Shyuki Yoshimura, “Tibetan translators of the Tri-Pitaka—in the Derge edition—” (芳村『インド大乘仏教思想研究』所収), pp. 88—90, Ye śes sde (Shaṅ) の項を見よ。彼が協力したインド側翻訳者名も同時に分る点で至便。
- 4) 芳村前掲書, p. 180 および p. 217 参照。
- 5) P版, Nos. 5846, 5847, 5848: D版, Nos. 4359, 4360, 4361.

において、断片的にはあるが、現今の学者によって既に紹介言及されている<sup>6)</sup>。

チベットの後代の学僧 lCañ skya Rol pañi rdo rje (1717—1786) も彼について次のように言及している。

大学者 Śāntarakṣita (*mkhan che Shi ba ḥtsho*) は聖 Nāgārjuna (*ḥphags pa Klu*) に追従する大流儀 (*śiñ rta chen po*) であるのはいうまでもないことであるから、〔チベットの〕当時の見解は Nāgārjuna の規定である見解より逸脱したものではない。Śāntarakṣita と Padmasaṃbhava (*mkhan slob*) お二方の弟子である大翻訳官 (*lo tstsha ba chen po*) Ye śes sde の『見解の忘備録 (*lTa bañi brjed byañ=TKh*)<sup>7)</sup>』によっても、〔Śāntarakṣita は〕Nāgārjuna の規定を主要となし給い、またそれ (=TKh) によっても〔彼は〕瑜伽行中観自立派 (*rNal ḥbyor spyod pañi dbu ma rañ rgyud pa*) の規定どおりになしたと思われるのである<sup>8)</sup>。

この記述は、Śāntarakṣita が Nāgārjuna の流儀を相承し、しかも瑜伽行中観自立派に属するものであったことを確証するために、その弟子たる Ye śes sde の TKh を重要な論拠となしたことを示している。今に伝えられる TKh においては、論師 Bhavya が経量部中観 (*mDo sde pañi dbu ma*)、論師 Śāntarakṣita が瑜伽行中観 (*rNal ḥbyor spyod pañi dbu ma*) と呼称されるのみ<sup>9)</sup> で、自立派 (*Rañ rgyud pa*) およびこれと対に使用される帰謬派 (*Thal gyur pa*) の呼称は認められないので、Śāntarakṣita が瑜伽行中観自立派に属したとする記述に対しては、Tson̄ kha pa 以降のチベット仏教史観を充分考慮して評価しなければならぬ<sup>10)</sup> が、TKh が初期伝播時代のチベット仏教を証言する有力な典拠として用いられていることには充分注目してよい。

当時のチベット仏教の実状を知るためには、一応後代の評価<sup>11)</sup>を離れて、当時

- 
- 6) 芳村前掲書；上山大峻「大蕃国大徳三蔵法師沙門法成の研究(下)」(『東方学報』京都、第39冊、昭和43年)、pp. 193—199；Yoshiro Imaeda, “Documents tibétains de Touen-houang concernant le concil du Tibet”, *Journal Asiatique* (1975), pp. 132—133.
- 7) 周知のように、TKhの冒頭は、その著作動機として、見解の区別・三乗・三身などについて忘備録として作られたもの (*brjed byañ du byas pa*) である旨を記す。この事情を踏まえて、TKhをかく呼称したもの。ちなみに、TKhはその最初の主題が題名として選ばれたわけであるが、この意味でTKhが著作全体の内容を包括する題名であるとは言い難い。
- 8) 東大蔵外目録, No. 93, *Grub pañi mthañi rnam par bshag pa*, Kha, 13b<sup>4</sup>—14a<sup>1</sup>.
- 9) TKh, P版, Cho, 252b<sup>1-2</sup>: “ā tsa rya Bha byas mdsad pa la ni mDo sDe pañi dbu ma shes btags / ā tsa rya Śā nta ra kṣi tas mdsad pa la ni rNal ḥbyor spyod pañi dbu ma shes btags so //”.
- 10) 考慮すべき問題点の指摘については、佐藤道郎「Prāsaṅgikaの軌跡」(『日本西蔵学会々報』第22号)、pp. 1—3参照。なお中観派に関するチベット伝承については、甚だ雑把なものであるが拙稿「中観派に関するチベットの伝承」(『三蔵』117)参照。
- 11) ごく最近のものを例にとつていうと、たとえば Y. Imaeda, *op. cit.*, p. 133 では

の人の手になる著作全体を着実に検討してみる必要がある。そういった意味では、*Ye śes sde* のみならず、他に *dPal brtsegs* などの著作も合わせて考察されねばならない<sup>12)</sup>が、現時点で筆者は、この方面に実質的素養を欠くのを遺憾とする。しかし、*STsG* を取上げたのは、*Ye śes sde* のこの小篇を手懸りとして、筆者自身この方面に関する不備を補っていく必要を感じたからにはほかならない。時間的余裕もなく不備は百も承知のうえであるが、今後に期するところがあるので忌憚のない御教示を給わりたい。

題名 *STsG* なる題名については多少の説明を要するであろう。この題名は、冒頭では *Saṅs rgyas gtso boḥi rgya cher ḥgrel pa*、結尾では *Saṅs rgyas gtso boḥi ṭi kā rgya cher ḥgrel pa* として示され前後一致しない<sup>13)</sup>が、*ṭikā* が *rgya cher ḥgrel pa* と同格であるとみれば、後者はそこにサンスクリットを挿入しただけであり、今はさして重要な問題とはならない。注意したいのは、*STsG* が註釈と銘打つからには、いかなる本文の註釈であったかということである。さもなくば、註釈とは名ばかりであったか。そこで、*saṅs rgyas gtso bo* が一体なにを意味していたかが重要な問題となってくる。

ちなみに、チベット大蔵経の東北および大谷目録によれば<sup>14)</sup>、いずれにおいても『仏身広註』なる訳名が与えられている。この訳名は、同目録中で、対応すべきサンスクリット題名として並記されている *Buddhātmaṭikā* とは適合するかもしれないが、チベット原題そのものと一致しているとは言い難い。すなわち、*buddhātman* から「仏身」という理解を導くことはできても、*saṅs rgyas gtso bo* 自体からそのような了解を取付けることは極めて困難なのである。しからば、これをあえて「仏身」と訳した積極的根拠が他に存したかといえ、決してそのような背景があったとは思えない。

題名のごとく、虚心に註釈であるという立場から *STsG* を読むならば、一読して、なにか具体的本文が註釈されている様が明白となろう。その具体的本文は、引用の通例に慣い、“... ces ḥbyuñ ba”, “... ces bya ba ḥbyuñ ba”, “... ces

---

自立派・帰謬派の区別が「インドの伝承によって (d’après la tradition indienne)」自明のこととして語られ、従って前者に属す *Śāntarakṣita*, *Kamalaśīla* の学系 (la branche *Svātantrika* à laquelle appartenaient *Āntrakṣita* et *Kamalaçīla*) もまるで事実であったかのように記述される。しかし、*la tradition indienne* は自明なことではなく、むしろチベット後代の伝承かもしれないのである。とにかく、このような曖昧な学系上に *Śāntarakṣita* — *Kamalaśīla* — *Ye śes sde* を位置づける観点を一応除外してかからねばならない。

12) 山口瑞鳳先生より、この方面に関し、*dPal brtsegs* のもの、さらには、*sNa tshogs* (雑部、P版では *No tshar*) 所収の種々の著作を配慮するようにとの御教示を受けたが、時間がなく本稿ではせっかくの御教示を活しきれなかった。

13) 前註1参照のこと。

14) 東北目録, p. 671, No. 4361, 大谷目録, p. 830, No. 5848 下の記載事項参照。

pa”などで示されている。今、この箇所を抜粋して提示すると次のごとくである。

- (1) / *sañs rgyas gtso la phyag ḥtshal lo* /  
 / *skyob paḥi chos la phyag ḥtshal lo* /  
 / *dge ḥdun che la phyag ḥtshal lo* /  
 / *gsum la rtag tu phyag ḥtshal lo* /<sup>15)</sup>
- (2) *tshogs chen gñis rdsogs mkhyen bshi sku gsum grub* /  
*rnam rtog mi mñah ci yañ sa ler\* mkhyen* /  
 \* D. *ler*, P. *le*.  
*chos sku nam*<sup>16)</sup> *mkhaḥ\*\* ḥdra gzugs sku mdses skur ldan* /  
 \*\* P. *nam mkhaḥ* /, D. *mkhaḥ*.  
*sañs rgyas dḥag bsam ḥrda la phyag ḥtshal lo* /
- (3) *chos dbyiñs rgyu ḥthun gsuñ rab bcu gñis*<sup>17)</sup> /  
*chos ñid skye ḥgag med ciñ spros las dben* /  
*de la dmigs te yon tan kun grub pa* /  
*legs rgyu dam paḥi chos la phyag ḥtshal lo* /
- (4) *ñon moñs sgrib dañ śes byaḥi sgrib pa dag* /  
*gñen pos rim par bsal te sar shugs\*\*\* pa* /  
 \*\*\* P. *shugs*, D. *bshugs*.  
*sems can don mdsad sañs rgyas shiñ sbyoñ ba* /  
*ḥphags paḥi dge ḥdun che* [*la phyag ḥtshal lo*] /<sup>18)</sup>

この抜粋から、本文は、恐らく4偈からなる韻文形式で、三宝に対する讃嘆を述べたものとの推測が成り立つ。しかるに、現チベット大蔵経中において、三宝を主題とする讃嘆文 (*bstod pa*, *stotra*) は頗る多いにかかわらず、*Sañs rgyas gtso bo* なる題名をもつ著作はいかなる形態のものも認めることができない。そこで、この題名が実際の著作名ではなかったとの想定のもとに、むしろ抜粋文を中心に、三宝を主題とする諸讃嘆文に当たってみた結果、以上の抜粋文が \**Trira*=

- 15) 以上については引用を明示する言葉は使用されていないが、以下に述べる結論を先取りして、引用文として抜粋す。
- 16) P版のこの句は全体10シラブルとなり1シラブル余計。韻文として省略しうるものであって、しかも韻文であることが意識されない場合に復活しうるシラブルを探すと、この“*nam*”ということになる。従って除去すべし。その結果はD版および *TRS* と一致する。
- 17) この句は8シラブルで1シラブル不足。*TRS* を参照して“*dañ*”を補うべきか。
- 18) “*la phyag ḥtshal lo*”は *STsG* にはない。しかし註釈中の引用のため重複を避けただけとすれば本来は当然あったものと予想される。

*tnastotra*<sup>19)</sup> (*TRS, dKon mchog gsum la bstod pa*, 『三宝讚』) なる著作にほとんどぴたり合致することが判明した。

この *TRS* については次項で触れることにして、両者の一致という結果を踏まえた上で、題名に関して結論を先にいうと、*sañs rgyas gtso bo* とは、実質的にはこの *TRS* なる著作を指し、その偈中の最初の言葉 (*sañs rgyas gtso*) によってこの著作を代表せしめた名称であるということになる。すなわち、*sañs rgyas gtso bo* とは著作の具体名ではないが、暗にそれを指示した名称といわねばならない。そこで、もし *STsG* を内容に即した題名に改めることが許されるなら、*dKon mchog gsum la bstod pañi rgya cher hgral pa* (『三宝讚詳解』) と言うべきであろう。それゆえ、*sañs rgyas gtso bo* とは、語義的にも内容的にも、「仏身」という理解を生ずる必然性を全くもたない。この言葉は、語義的には文字どおり「最勝なる仏」のことであり、内容的にはまさに仏宝 (*buddha-ratna*) のことである<sup>20)</sup>。この点で、この題名は、三宝を等しく扱った註釈の題名としては適切なものではないかもしれない<sup>21)</sup>。この事情は、あたかも、*Ye śes sde* の他の著作 *TKh* なる題名が、そこで取扱われる数箇の主題中の最初のものによって代表されているのと類似した現象と思われる<sup>22)</sup>。

典拠 以上の先取りした結論に従えば、*STsG* は *Ye śes sde* 自身の著作でありながら、一方歴とした註釈であるという性格も付与される。ここで、その典拠となったと思われる *TRS* のチベット訳文を和訳と共に提示する。煩を厭わず、先の抜粋文と比較検討されたい。

*rgya gar skad du / Tri ra tna sto traṃ\* /*

\* D. *traṃ*, P. *tra*.

*bod skad du / dKon mchog gsum la\*\* bstod pa /*

\*\* P. *la*, D. *gyi*

19) P版, No. 2035, Ka, 122b<sup>4</sup>—123a<sup>1</sup>: D版, No. 1144, Ka, 104b<sup>4</sup>—105a<sup>1</sup>. D版は *dKon mchog gsum gyi bstod pa* とするが、P版に従う。

20) 後に触れる *TRS* の註釈 *TRSV* (P版, Ka, 123a<sup>3-8</sup>) によれば、「仏 (*sañs rgyas*)」は断 (*spañs pa*, *prahāṇa*) と智 (*ye śes*, *jñāna*) としての自利の完備 (*ñid kyi don phun sum tshogs pa*, *svārtha-sampad*) を表わし、「最勝なること (*gtso bo*)」は三地の大自然 (*sa gsum dbaṅ phyug chen po*) としての利他の完備 (*gshan gyi don phun sum tshogs pa*, *parārtha-sampad*) を表わすとされる。すなわち、「最勝なる仏」とは、自利・利他の二面から仏宝を述べたものということになる。

21) 勿論、仏宝が他の二つ (法宝・僧宝) の根本であるという観点より、残りのものをも包含しうるであろうが、ここではそのような拡大解釈をとらない。

22) 前註7参照。ただし *TKh* の場合は、本文中では “*lta bañi bye brag*”, 題名では “*lta bañi khyad par*” であるから事情は必ずしも同じとはいえない。しかし、いずれの場合も本来題名の与えられていなかったものが、後人の手によって命名されたとは考えられまいか。

(*dkon mchog gsum la phyag htshal lo* )<sup>23)</sup>

- (1) / *sañs rgyas gtso la phyag htshal lo* /  
/ *skyob pañi chos la phyag htshal lo* /  
/ *dge ḥdun che la phyag htshal lo* /  
/ *gsum la rtag tu bdag phyag htshal* /
- (2) / *tshogs chen gñis rdsogs mkhyen bshi sku gsum grub* /  
/ *rnam rtog mi mñah ci yañ sa le mkhyen* /  
/ *chos sku mkhaḥ ḥdra gzugs sku\*\*\* mdses skur\*\*\*\* ldan* /  
\*\*\* D. *gzugs sku*, P. *gzug bsku*.  
\*\*\*\* P. *skur*, D. *sku*.
- / *sañs rgyas dpag bsam ḥdra la phyag htshal lo* /
- (3) / *chos ñid rgyu mthun gsuñ rab bcu gñis dañ* /  
/ *chos la skye ḥgag med ciñ spros las\*\*\*\*\* dben* /  
\*\*\*\*\* D. *las*, P. *la*.
- / *de la dmigs te yon tan kun grub pa* /  
/ *legs rgyu dam pañi chos la phyag htshal lo* /
- (4) / *ñon moñs sgrib dañ śes byañi sgrib pa dag* /  
/ *gñen pos rim par bsal nas sar\*\*\*\*\* bshugs shiñ* /  
\*\*\*\*\* D. *sar*, P. *sañs rgyas sar*.
- / *sems can don mdsad sañs rgyas shiñ sbyoñ ba /\*\*\*\*\**  
\*\*\*\*\* D. *ba*, P. *bañi*.
- / *ḥphags pañi dge ḥdun che la phyag htshal lo* //

*dKon mchog gsum la\*\* bstod pa slob dpon chen po Ma ti tsi*  
*tras mdsad pa rdsogs so //*

インドの言葉で *Triratnastotra*

チベットの言葉で *dKon mchog gsum la bstod pa*

(三宝 (ratna-traya) に帰依し奉る。)

- (1) 最勝なる仏 (buddha) に帰依し奉る。  
守護なる法 (dharma) に帰依し奉る。  
偉大なる僧 (saṃgha) に帰依し奉る。  
〔三〕 宝に常に私は<sup>24)</sup> 帰依し奉る。

23) この一句P版に欠く。ない方がすっきりするので一応除外して考えるが、この註釈 TRSV では、P版・D版とも “*sañs rgyas gtso...*” 以下の註釈に入る前に、 “*srid pa gsum gi bla ma dkon mchog gsum la phyag htshal ba la sogs pa...*” とあり、偈に含まれないまでも、これに相当する句がなんらかの形で存在したかもしれない。

24) STsG ではこの「私 (bdag)」を欠く。両者とも7シラブルであることは “*lo*” の

- (2) 二つの偉大な資糧 (saṃbhāra) が完成し、四智 (catur-vijñāna) と三身 (trikāya) が成就し、  
 分別 (vikalpa) なしになにごとも明瞭に知り給い、  
 法身 (dharma-kāya) は虚空 (ākāśa)のごとく、色身 (rūpa-kāya) は美麗なる  
 肉体を具備せる  
 如意樹 (kalpa-taru)のごとき仏に帰依し奉る。
- (3) 法性等流<sup>25)</sup>(dharmatā-niṣyanda)なる十二分教 (dvādaśāṅga-pravacana) と、  
 法において<sup>26)</sup>生滅なく戲論を離れたものと、  
 それを対象としてすべての功徳 (guṇa) が成就する  
 善因なる正法 (saddharma) とに帰依し奉る。
- (4) 煩惱障 (kleśāvaraṇa) と所知障 (jñeyāvaraṇa) とを  
 対治することによって、順次に除去して地 (bhūmi) に入り、  
 有情 (sattva) を利益なさり、仏国 (buddha-kṣetra) を清める  
 聖なる大僧伽 (mahā-saṃgha) に帰依し奉る。

『三宝讃』なる、大論師 Maticitra の著作完了。

ここに提示した TRS の 4 偈と、先の STsG 抜粋文とを比較するならば、両者のサンスクリット原文が同一であったことは疑う余地がない<sup>27)</sup>。さらに、チベット訳相互の間においても、両者は極めて密接な関係にあったことを推測させる。しかも本稿の意図からすれば、そのチベット訳相互の関係の方をむしろ問題とす

有無で調整されている。

- 25) STsG では「法界等流 (*chos dbyiṅs, dharma-dhātu*)」とする。この相違が単なるミスに基づくものでないことは、STsG 中の説明、TRSV の註釈によって確認される。前者では「法界」、後者 (P 版, 126a<sup>7</sup>) では「法性」として註され、それぞれのテキストにおいて同一性が保たれているからである。しかし、両語の意味に関する差異は認められない。
- 26) これが “*chos la*” を示すのに対し、STsG は “*chos ṅid*” を持つ。TRSV の解釈によれば、前句が「教法 (*bstan paḥi chos, deśanā-dharma*)」を示すのに対し、この後句は「勝義法 (*don dam paḥi chos, paramārtha-dharma*)」を示す。この点、STsG と TRSV の解釈に相違はないと思われる。STsG は *chos ṅid (dharmatā) = skye ḥgag med ciṅ spros las dben* という理解で、この句全体で勝義法を示すことでは変りはないからである。ただし、TRSV では、あくまでも “*chos la*” と読まれ、「法 (dharma) とは正法 (saddharm) である (D 版 “*chos ni dam paḥi chos so //*” をとる。P 版 “*chos la don dam paḥi chos so //*” は不可)。そのうち、勝義として (*paramārthataḥ*) 生滅なく、また戲論すなわち常・断、来・去、一・異というそれら戲論を離れたもの [が勝義法である]。」(D 版, 108a<sup>5-6</sup>: P 版, 126b<sup>8</sup>—127a<sup>2</sup>) と解釈されている。一句全体の意味は同じでも、*dharmatā* と *dharma* については、それぞれの読みが保持されていると思われる。
- 27) ただし、前註 24, 25, 26 で指摘したような差異が認められる。このうち、24 の例はサンスクリットが異っていたとは言えない。恐らく原文の動詞が一人称で示されていたために、一方が人称代名詞を明示し、他方がそれをなさなかったに過ぎないと思われる。しかし、残り 2 例はサンスクリットとしても異って読まれていたと判断せざるをえない。

べきであろう。しかし、現存の *TRS* には *Maticitra*<sup>28)</sup> の著作と記されているのみで、翻訳者に関する言及は全くなく、これだけでは *TRS* のチベット語訳者と *Ye śes sde* との関係を考察することはできない。ただし、現チベット大蔵経中には、*TRS* の直後に *Jinaputra* (*rGyal baḥi sras*)<sup>29)</sup> の *TRS* 註釈である \**Triratnastotravṛtti*<sup>30)</sup> (*TRSV, dKon mchog gsum la bstod paḥi ḥgrel pa*, 『三宝讚註』) が収録されており、それは *Jñānaśānti* と *dPal gyi lhun poḥi sde* とによって翻訳されたと明記され、しかも *TRSV* チベット訳中に引かれる本文は *TRS* チベット訳と全く一致する。この点より、翻訳者名が記されていない *TRS* も、*TRSV* のチベット訳者 *Jñānaśānti* と *dPal gyi lhun poḥi sde* とによって訳出されたかもしれない。この両訳者について筆者は未詳であるが、*Ye śes sde* と *dPal gyi lhun poḥi sde* とは、他の仏典訳出において、それぞれが同一のインド側翻訳者 *Vidyākarasiṃha* に協力していたことが目録によって確認される<sup>31)</sup>。この事実によって、同名の *Vidyākarasiṃha* が別々に存在したのではない限りは、*Ye śes sde* と *dPal gyi lhun poḥi sde* とは、前後はともかく、ほぼ同時代の人ということが出来る。従って、*Ye śes sde* が *TRS* および *TRSV* のチベット訳を参照しえた可能性は大いにありうるであろう。ましてや、*TRS*, *TRSV* のサンスクリット原文を直接参看した可能性については言うまでもないことであろう。

以上、*STsG* の直接の典拠についていささか推測を重ねたが、我々のより大きな興味は *Ye śes sde* の思想的背景ともいべき典拠の方にある。*Ye śes sde* はインド唯識文献の重要な典籍の翻訳に参加しており<sup>32)</sup>、特にその著書 *TKh* に

28) *Mātṛceṭa* のこと。*Aśvaghōṣa* と同一人物ともみなされるが、恐らくは仏教詩人として混同されたため、彼よりも少し先輩の同時代人と推定されている。M. Winternitz, *History of Indian Literature*, Eng. tr., Vol. II, pp. 269—272 参照。

29) 唯識の論師。チベット訳としては、この著作の他に、*Bodhisattvaśīlaparivarta* に対する註釈 (P版, No. 5547), *Abhidharmasamuccaya* に対する註釈 (P版, Nos. 5554, 5555) があって、この三註釈のチベット訳には、すべて *Ye śes sde* が関与していたことが知られる。

30) P版, No. 2036, Ka, 123a<sup>1</sup>—128b<sup>8</sup>: D版, No. 1145, Ka, 105a<sup>1</sup>—109b<sup>7</sup>.

31) P版, No. 351 (D版, No. 1083) は *Vidyākarasiṃha* と *Ye śes sde* の校閲したもの、P版, No. 218 (D版, No. 510) は *Vidyākarasiṃha* と *dPal gyi lhun poḥi sde* の訳。すなわち、これによって、チベットの翻訳官 *Ye śes sde* と *dPal gyi lhun poḥi sde* とは、共に *Vidyākarasiṃha* と協力して翻訳に従事したことがあったと認めうる。

32) デンカルマ目録 (812年) 中、識についての論書 (*rnam par śes paḥi bstan bcos pa*) として挙げられている 34 典 (S. Yoshimura, “The Denkar-Ma, An Oldest Catalogue of the Tibetan Buddhist Canons”, 芳村前掲書所収, pp. 60—63) についていえば、*Ye śes sde* が翻訳に関与したと思われる典籍は 20 を数える。この中には、*Yogācārabhūmi*, *Madhyāntavibhāga*, *Mahāyanasamgraha* など、唯識文



については、既に仏智に関して唯識的影響の濃厚なことが指摘されている<sup>33)</sup>。同様なことが、本稿で取上げた *STsG* の場合にもいえる。*STsG* は、註釈という性格上、その本文である *TRS* の「三宝」という粹に限定された面が強いが、それにもかかわらず註釈文中には唯識思想の影響が深く影を落している。この点は、後に提示する和訳について実際に確認して頂きたい。ただし遺憾ながら、本来かかる意味での和訳紹介においては、それらの影響のよってきたるインド側典拠を明示するのが研究の義務であるにもかかわらず、本稿においては然るべき処置がとられたとはいえない。その処置を困難にしたのは、筆者の怠慢もさることながら、多くは *STsG* がいかなる典拠にも言及しないことによる。これは、種々の典籍名に言及する *TKh* に比べてやはり一つの特徴というべきであろう。この特徴は、*STsG* が *Ye śes sde* にとって自家薬籠中の言葉で語られたことを示すと共に、史料的价值としては *TKh* に今一步譲らざるをえないことを物語っている。

**概略** *STsG* の大綱がその本文である *TRS* に規制されていることは上述のごとくであり、それを再び繰り返す必要はないが、ここでは、*STsG* が「三宝」というその大綱に添って整然と記述されていることに注意したい。三宝のうち、仏宝と僧宝とは、原因 (*rgyu, hetu*)・結果 (*hbras bu, phala*)・本性 (*rañ bshin, prakṛti*)・自利 (*bdag gi don, svārtha*)・利他 (*gshan gyi don, parārtha*) なる五種の完備 (*phun sum tshogs pa, sampad*) という観点から、法宝は五種中の自利を欠く四種の完備という観点から考察されている<sup>34)</sup>。この観点のもとに説明される教

---

献として重要なもののほとんどが含まれている。同様に中観関係に眼を転ぜば（芳村前掲書所収，pp. 55—57），33 典中 10 典が *Ye śes sde* の関与した翻訳と思われる。この比率から唯識関係の翻訳が彼の主要な役割だったと考えられないわけでもない。しかし、この 10 典中に、後世のチベット学僧により「東方自立派の三論 (*rañ rgyud śar gsum*)」と称された（前掲拙稿，p. 8 および註 37 参照，東方とは *Nālandā* のことか）うち、*Satyadvaya, Madhyamakālaṅkāra* が *Ye śes sde* の関与した翻訳と推測されることに注意されたい。ちなみに、残りの一つ *Madhyamakāloka* は *dPal brtsegs rakṣita* の関与した訳として伝わる。

33) 芳村前掲書，pp. 180—182 参照。ここで、本稿の目的と直接関係はないが、拙稿“*Sthiramati and Śilabhadra*” (*JIBS*, XXV-1 所収予定) に関連して一言付記したい。*Sthiramati* は *SAVBh* 中で *\*Buddhabhūmisamādhiṭkā* なる著作名の下に *Śilabhadra* の *BBhV* と全く一致する文を引用する。そこで、先の拙稿にて、この事実をいかに解釈すべきかという可能性を二つ推測したわけである。*BBhV* の訳者は知られていないが、*BBhS* の方は *Ye śes sde* を含む翻訳者たちによって、*ṭikā* と校合して (*ṭi ka dañ sbyar te*) 訳出されたことが *colophon* によって知られる。また *Ye śes sde* は *TKh* 中で 3 箇所ほど (P 版, Cho, 258a<sup>2</sup>, b<sup>4</sup>, 259a<sup>1</sup>) *ḥPhags pa Sañs rgyas kyi saḥi ṭi kā* (*\*Arya-Buddhabhūmiṭkā*) なる著作名に言及している。この *Ye śes sde* の見たものが *BBhV* であるならば、それが *Sthiramati* の呼ぶように *\*Buddhabhūmisamādhiṭkā* と呼称された可能性もかなり補強されるのではないかと考える。

34) *hetu-sampad, phala*<sup>0</sup>, *prakṛti*<sup>0</sup>, *svārtha*<sup>0</sup>, *parārtha*<sup>0</sup> の五種の観点は、恐らく唯

義・用語は唯識思想を背影にもつことを充分推測させるに足る。また、その簡潔さは、よく咀嚼された当時のチベット仏教のレベルを物語っているであろう。以下、細分を含めて *STsG* の概略を図示する。右側カッコ内の数字・ローマ字は *TRS* を 4 偈として数えた場合の偈番号と句の所在を示す。

○ 総序 (1abcd)

A 仏宝 (*sañs rgyas dkon mchog*)

i 原因の完備 (2 a)

a 福德資糧	{	布	施	}	六波羅蜜
		持	戒		
		忍	辱		
		禪定の一部			
		精進の一部			
b 智慧資糧	{	禪定の一部		}	
		智	慧		
		精進の一部			

ii 結果の完備 (2 a)

a 四 智	{	大円鏡智……………ア—ラヤ識	}
		平等性智……………染 汚 意	
		妙観察智……………意 識	
		成所作智……………五感覺器官識	
b 三 身	{	法 身 — 大円鏡智	}
		受 用 身 { 平等性智	
		妙観察智	
		変 化 身 — 成所作智	

iii 本性の完備 (2 b)

iv 自利の完備 (2 c)

a 法 身 — 無 色 身

b 色 身 — 三十二相八十種好

v 利他の完備 (2 d)

B 法宝 (*chos dkon mchog*)

i 原因の完備 — 法 界 (3 a)

ii 結果の完備 — 十二分教 (3 a)

iii 本性の完備 — 無生滅無戲論 (3 b)

iv 利他の完備 — 善 因 (3cd)

識文献中にその典拠が求められうるように思うが、筆者は未だ確認できない。*TRSV* はこの五つないし四つを術語として明確に導入しているとは思われない。前註 20 で参照した箇所では *svârtha*<sup>0</sup>, *parârtha*<sup>0</sup> 両面からの言及がみられる。

C 僧宝 (*dge ḥdun dkon mchog*)

- i 原因の完備 —— 煩惱障・所知障の対治 (4 a)
- ii 結果の完備 { 菩薩の十地 (4 b)  
声聞・独覚の七地
- iii 利他の完備 —— 身・語・意の方便 (4 c)
- iv 自利の完備 —— 仏国を清めること (4 c)
  - a 外的環境世界を清めること
  - b 内的本質世界を清めること
- v 本性の完備 —— 業・煩惱・苦より超克 (4 d)

D 総結

備考 以下, *STsG* を和訳紹介するにあたり, 筆者のとった処置についていささか記す。

周知の術語については漢訳語を採用した。術語の頻度が高く, いわゆるの現代語訳ではかえって煩雑になると考えたからである。

和訳中には, チベット語の他にサンスクリット語も挿入したが, これは勿論, *STsG* が元来チベット語で書かれたことを忘れたためではない。あくまでも, 仏教術語を容易に想起し, いずれインド側典拠も検索しやすいようにとの, 全く便宜的な処置である。この点, *Ye śes sde* の著作は, *STsG* のみならず, 公けに定められた翻訳チベット語<sup>35)</sup>をきちんと採用しているので, かかる便宜的処置も理解の上からは決して無意味ではあるまい。ただ, 便宜的処置であることを忘れて, 検索の労もとらずに, それらがインドに淵源をもつことを自明のこのように考えることは厳に慎まねばならない。

なお, *STsG* が *TRS* の註釈という形で誕生したからには, そのインド側の註釈 *TRSV* も常に参照されるべきであったが, これを充分になしえなかったのを遺憾とする<sup>36)</sup>。

和 訳

最勝なる仏に関する詳解 *Shañ Ye śes sde* の著作<sup>37)</sup>

35) 新訳語法制定(*skad gsar bcad*, 814年)にのっとった用語。この年に *Mahāvvyut-patti* 成立, その前々年に *IDan dkar ma* の編纂が行われた。山口瑞鳳「チベット仏教」(『講座東洋思想』5), pp. 251—252 参照。812—814年は *Ye śes sde* の最も活躍した時期かと思われる。*STsG* 中には *Mvyut.* にみられない術語も二・三認められる。それらの語については以下の註記にて触れたい。

36) 以下, *TRSV* 対応箇所 of 指摘を最底条件として提示する。

37) P版, “*Sañs rgyas gtso boḥi rgya cher ḥgrel pa* *Shañ Ye śes sdes mdsad pa bshugs so* //”。D版は下線部分を欠く。

○ 総序 「最勝なる仏に帰依し奉る<sup>38)</sup>。守護なる法に帰依し奉る<sup>39)</sup>。偉大なる僧に帰依し奉る<sup>40)</sup>。〔三〕宝に常に帰依し奉る。〕<sup>41)</sup>(labcd)

A 仏宝 仏については、五種の義 (*don, artha*) によって説示される。またそれらはなにか。 i) 原因の完備 (*rgyu phun sum tshogs pa, hetu-sampad*) と, ii) 結果の完備 (*ḥbras bu phun sum tshogs pa, phala<sup>0</sup>*) と, iii) 本性の完備 (*rañ bshin phun sum tshogs pa, prakṛti<sup>0</sup>*) と, iv) 自利の完備 (*bdag gi don phun sum tshogs pa, svārtha<sup>0</sup>*) と, v) 利他の完備 (*gshan gyi don phun sum tshogs pa, parārtha<sup>0</sup>*) とである。このように、〔仏は〕五種の義によって説示されるのである。そのうち、

i 「二つの偉大な資糧 (*tshogs, sambhāra*) が完成する」<sup>42)</sup>(2a) と出ていることによって、原因の完備が説示されるのである。「二つの偉大な資糧が完成する」とは福德 (*bsod noms, puṇya*) と智慧 (*ye śes, jñāna*) との二資糧 (*tshogs gñis, saṃbhāra-dvaya*) である<sup>43)</sup>。またそれはなにか。六波羅蜜 (*pha rol tu phyin pa drug, ṣaṭ-pāramitā*) が二資糧にまとまった (*ḥdus*) ものである<sup>44)</sup>。そのうち、

a 布施波羅蜜 (*sbyin paḥi pha rol tu phyin pa, dāna-pāramitā*) と、持戒波羅蜜 (*tshul khrims kyī pha rol tu phyin pa, śīla<sup>0</sup>*) と、忍辱波羅蜜 (*bzod paḥi pha rol tu phyin pa, kṣānti<sup>0</sup>*) と、禪定波羅蜜 (*bsam gtan gyi pha rol tu phyin pa, dhyāna<sup>0</sup>*) 中の、慈の等持 (*byams paḥi tiñ ñe ḥdsin, maitrī-samādhi*) などの四無量 (*tshad med pa bshi, catur-apramāṇa*) と天の等持など、すべての相の等持<sup>45)</sup>

38) TRSV, P 版, 123a<sup>3-8</sup>.

39) TRSV, P 版, 123a<sup>8</sup>—b<sup>3</sup>.

40) TRSV, P 版, 123b<sup>3</sup>—124a<sup>3</sup>.

41) TRSV, P 版, 124a<sup>3-7</sup>.

42) TRSV, P 版, 124a<sup>7</sup>—b<sup>3</sup>.

43) D 版, “*tshogs gñis yin te*”. P 版, “*gñis te*”.

44) TRSV には “*de yañ sbyin pa dañ tshul khrims dañ bzod pa ni bsod noms te | bsam gtan dañ śes rab ni ye śes so || brtson ḥgrus ni gñi gar gtogs so ṣes ḥPhags pa dgoñs pa ñes par ḥgrel pa las gsuñs so ||*” (P 版, 124b<sup>1-2</sup>) とあり、*Samdhinirmocanasūtra* (SNS) が典拠とされている。しかし、これによれば精進のみが二資糧に属することになるが、SNS, Lamotte ed., p. 131 によれば、精進と禪定の二つが二資糧に属することになっており、実際の SNS の記述の方が以下の STsG の説明と一致する。Ye śes sde が SNS を知っていたことは言うまでもない。

45) 以上の、慈 (*maitrī*)・悲 (*karuṇā*)・喜 (*muditā*)・捨 (*upekṣā*) の四無量と天の等持などを含んだものが、「相の等持」といわれているわけであるが、「相の等持」なる典拠筆者未詳。恐らくは次の「真如の等持」と内容上対になるべきものであろうから、相は *nimitta*, 真如は *tathatā* を原語としてなんらかの典拠があったようにも思う。とすれば、*Mahāyanasūtrālamkāra* (MSA), Lévi ed., p. 169, l. 26, “*anānā-kāra-bhāvitam nimitta-tathatayor anānātva-darśanāt /*” なども参考にされるべきか。天の等持についても具体的内容未詳。四無量については *Abhidharmakośabhāṣya* (AKBh), Pradhan ed., p. 452, ll. 3—17 参照。

(*mtshan maḥi tiñ ñe ḥḍsin, nimitta-samādhī*) と、精進〔波羅蜜〕 (*brtson ḥgrus, vīrya*) の一部とが、福德資糧に含まれる。

**b** 禪定〔波羅蜜〕中の三解脱門<sup>46)</sup> (*rnam par thar paḥi sgo gsum, trīṇi vimokṣamukhāni*) である真如の等持 (*de bshin ñid kyī tiñ ñe ḥḍsin, tathatā-samādhī*) と、智慧波羅蜜 (*śes rab kyī pha rol tu phyin pa, prajñā<sup>0</sup>*) と、精進〔波羅蜜〕の一部とが、智慧資糧に含まれる。

このように、二つの偉大な資糧が完成することによって、原因が完備するのである。

**ii** 「四智 (*mkhyen bshi, catur-jñāna*) と三身 (*sku gsum, tri-kāya*) が成就する」<sup>47)</sup> (2a) ということによって、結果の完備が説示される。

**a** 四智 (*mkhyen bshi*) とは四智<sup>48)</sup> (*ye śes bshi*) についていわれる。それはなにか<sup>49)</sup>。大円鏡智 (*me loñ lta buḥi ye śes, ādarśa-jñāna*) と平等性智 (*mñam pa ñid kyī ye śes, samatā<sup>0</sup>*) と妙観察智 (*so sor rtog paḥi ye śes, pratyavekṣā<sup>0</sup>*) と成所作智 (*bya ba grub paḥi ye śes, kṛtyānuṣṭhāna<sup>0</sup>*) との四つである<sup>50)</sup>。それはまたいかなるもの (*dños po, vastu*)<sup>51)</sup> であるのか。凡夫 (*so soḥi skye bo, pṛthagjana*) の状態における八識身 (*rnam par śes paḥi tshogs brgyad, aṣṭa-vijñāna-kāya*) としての基層 (*gnas, āśraya*) が変貌する<sup>52)</sup> (*gyur, parivṛtti*) ならば、四智となるのである。そのうち、アーラヤ識 (*kun gshi rnam par śes pa, ālaya-vijñāna*) としての基層が変貌するならば、大円鏡智となるのである。染汚意 (*ñon moñs pa can gyīd, kliṣṭa-manas*) としての基層が変貌するならば、平等性智となるのである。凡夫の状態における意識 (*yid kyī rnam par śes pa, mano-vijñāna*) としての基層が

46) *sūnyatā, apraṇihita, ānimitta* の三種。語義については *AKBh*, p. 449, l. 7—p. 450, l. 8 参照。SNS, p. 140, ll. 21—25 では七種の清淨慧 (*śes rab rnam par dag pa*) として、その第三に「その慧によって空・無願・無相の三解脱門において解脱門の義をまた如実に知る (*yañ dag pa ji lta ba bshin du rab tu śes pa*)」と説く。「真如の等持」といわれる典拠は不明であるが、「如実に知る」といわれていることで *tathatā* の命名を推測しうる。

47) *TRSV*, P 版, 124b<sup>3</sup>—125b<sup>1</sup>。以上を「それによって勝れた原因の集積を説示し」と結び、「今や結果を説示するために」と以下の説明に入る。すなわち、原因と結果から考察すること *STsG* に同じ。

48) 和訳は同語反復となるが、チベット語としては尊敬語 *mkhyen* を *ye śes* で説明したもの。

49) P 版, “... *bya /de gañ she na /*”. D 版, “... *bya ste gañ she na /*”。

50) 四智および以下に述べられるその八識との関係については、*MSA*, *MSAT*, *SAVBh*, *BBhS*, *BBhV* など参照すべき文献は多い。それら文献の詳細については既にいくつかの拙稿で触れたのでここには省略する。*TKh* については、芳村前掲書, pp. 181—182 参照。*TRSV* も四智と八識については同様の記述。

51) *vastu* については拙稿「〈三種転依〉考」(『仏教学』第2号), pp. 57—61, 特に p. 60 の図参照。

52) 「基層が変貌する」(*gnas gyur*) という和訳については上掲拙稿 pp. 46—51 参照。

変貌するならば、妙観察智となるのである。五感覚器官の識 (*sgo lñahi rnam par śes pa*)<sup>53)</sup>としての基層が変貌するならば<sup>54)</sup>、成所作智となるのである。このように、四智とは以上のものである。

**b** 三身とは、法身 (*chos kyi sku, dharma-kāya*) と受用身 (*loñs spyod rdsogs pañi sku, saṃbhoga-kāya*) と変化身 (*sprul pañi sku, nirmāṇa-kāya*) との三つである。またそれらはなにか。四智と三身とを結びつけるならば、大門鏡智は法身と結びつき、平等性智と妙観察智との二つは受用身と結びつき、成所作智は変化身に結びつくのである<sup>55)</sup>。

このように、これら三身と四智とは、原因である二資糧の結果であるから<sup>56)</sup>、結果の完備といわれるのである。

**iii** 「分別なしになにごとも明瞭に知り給う<sup>57)</sup>」(2b) と出ていることにおいて<sup>58)</sup>、本性の完備が説示される。それに関して、すべての仏・世尊の本性は、分別 (*rnam par rtog pa, vikalpa*) が塵ほどもなく、雑染 (*kun nas ñon moñs pa, saṃkleśa*) や清浄 (*rnam par byañ ba, vyavadāna*)、有為 (*ḥdus byas, saṃskṛta*) や無為 (*ḥdus ma byas, asaṃskṛta*)、外的環境世界 (*phyi snod kyi ḥjig rten, bāhya-bhājana-loka*) や内的本質世界 (*nañ bcud kyi ḥjig rten*)<sup>59)</sup>など十方のすべての世界 (*ḥjig rten gyi khams, loka-dhātu*) におけるあらんかぎりの (*ji sñed yod pa*) それらすべての法を、あるがまま (*ji lta ba bshin*)<sup>60)</sup> 誤りなく<sup>61)</sup>、アームラの実 (*skyu ru ra, āmra*) を御手の掌 (*phyag mthil*) に置いたように、明瞭に知り給うから、「分別なしになにごとも明瞭に知り給う」といわれるのであって、[それが] 以上のようなすべての仏の本性なのである。

53) 一般的な用語ではないように思うが、*TRSV* (P版, 124b<sup>6</sup>) も全く同じ語を使っているので、*pañca-mukha-vijñāna* のごときサンスクリットが考えうる。*mukha* はその場合対象が飛び込んでくる入口としての感覚器官の意である。「五識」に同じ。

54) P版, D版とも “*ni*” とあるが前例に慣って “*na*” と読む。

55) “*dañ*” とあるが一応ここで切る。以上の四智と三身の関係は拙稿「〈清浄法界〉考」(『南都仏教』第37号) pp. 1–28 で取上げた唯識文献の所説と一致する。特に p. 4 の図参照。勿論 *TRSV* と同じである。

56) 文はここで切れる。“*dañ*” 以前の文と共に理由として完結させるべきであろうが、意味上以下にかかる理由句として訳した。

57) *TRSV*, P版, 125b<sup>1-5</sup>。

58) P版, “*na*”, D版, “*ni*”。

59) 外的環境世界に対して *sattva-loka* を指すと思われるが、このような用語例について筆者未詳。勿論 *Mvyut.* になし。内容説明は後出す。和訳 *Civ b* 参照。

60) D版による。P版は “*ji lta ba bshin du*”。先の “*ji sñed yod pa*” と対になることが意識されていたと思われる。すなわち、両者は唯識文献中にみえる *yathā-vadbhāvikatā* と *yāvadbhāvikatā* という対概念の反映と思われる。なお, *SNS*, p. 99 参照。

61) D版, “*ma nor bar*”, P版, “*ma nor ba*”。

iv 「法身 (*chos sku, dharma-kāya*) は虚空 (*nam mkhaḥ, ākāśa*) のごとく、色身 (*gzugs sku, rūpa-kāya*) は美しい肉体を具備する」<sup>62)</sup> (2c) と出ていることによって、自利の完備が説示される。そのうち、

a 仏の法身は非肉体的なものであり (*gzugs can ma yin pa, arūpin, 無色身*)、すべての分別を離れ、すべての戯論 (*spros pa, prapañca*) を超越した真実であって、いかようにしようとも「全体が」対象的に把握されることはない (*dmigs su med pa*)。たとえば、虚空がいかようにしようとも「全体が」対象的に把握されることのないのと同様であるから、「法身は虚空のごとし」といわれるのである。

b 色身は、個々の教化対象者 (*gdul bya, vineya*) すべての識別 (*rnam par rig pa, vijñapti*) が願い求める (*mos śiñ dad pa*) のに応じて、そのとおりに美しい姿で現われる (*mdses par snañ ba*) から、「色身は美しい肉体を具備する」といわれる。それはまた、世尊が姿を現わし給う無上 (*hog min*) にして偉大なる現等覚 (*mñon par rdsogs par byañ chub pa, abhisambodhi*) の住处 (*gnas*) において、偉大な修行階梯に入った (*sa chen po la shugs pa, mahābhūmi-praviṣṭa, 入大地*) 菩薩 (*byañ chub sems dpaḥ, bodhisattva*) たちの円座 (*dkyil ḥkhor, maṇḍala*) で、三十二相 (*mtshan bzañ po*<sup>63)</sup> *sum cu rtsa gñis = dvā-triṃśan-mahāpuruṣa-lakṣaṇa*) と八十種好 (*dpe byad bzañ po brgyad cu, aśīty-anuvyañjana*) で飾られて、法を享受し給うお方 (*chos la loñs spyod par mdsad pa*) 「として現われ」<sup>64)</sup>、あるいは、世尊シーキャムニ (*Śākya thub pa, Śākyamuni*) のもとで、勝解行地 (*mos pas spyod baḥi sa, adhimukti-caryā-bhūmi*) に住している菩薩たちおよび聖なる声聞 (*ñan thos, śrāvaka*) などの集った円座 (*ḥkhor gyi dkyil ḥkhor, pariṣaṇ-maṇḍala*) において、三十二相と八十種好で飾られて、出家のあり方に留まり給うお方 (*rab tu byuñ baḥi tshul du bshugs pa*) 「として現われ」、あるいはまた、五種の衆生<sup>65)</sup> (*ḥgro baḥi ris lña*) それぞれの身体に見合った美しいものとして種々の身体を示すから、「色身は美しい肉体を具備する」といわれるのである。

以上が自利の完備である。

v 「如意樹 (*dpag bsam, kalpa-taru*)<sup>66)</sup>のごとき仏に帰依し奉る」<sup>67)</sup> (2d) と出て

62) TRSV, p. 125b<sup>5</sup>—126a<sup>2</sup>.

63) 一般には *skyes bu chen poḥi mtshan* が用いられる。Mvyut., No. 235, 『俱舍論索引』第1部, p. 194, *dvātriṃśan-mahāpuruṣa-lakṣaṇa* の項参照。

64) 以上は、現等覚の場で、入地の菩薩に対して受用身 (*saṃbhoga-kāya*) として現われる色身を叙したものであり、以下が Śākyamuni としての変化身 (*nirmāṇa-kāya*) であるのに対応しているであろう。TRSV が「色身は美しい肉体を具備する、とは〔三十二〕相と〔八十〕種好が明々白々たる受用〔身〕と変化身とである」(126 a<sup>1-2</sup>) とのみ述べるのを更に詳細に論じた観がある。

65) 筆者未詳。いわゆる天・人・畜生・餓鬼・地獄の五趣か。なお後註94参照。

66) すべての望みをかなえるという神話上の樹。

いることによって、利他の完備が説示される。それについていえば、仏・世尊は如意樹あるいは如意宝 (*yid bshin gyi nor bu rin po che, cintā-maṇi*) に同じい。たとえば、如意樹や如意宝は、分別が塵ほどもなくても、ある幸運な人 (*skal ba can*) が〔それを〕獲得するか、あるいは〔それが〕存在するならば、盲人が物 (*gzugs, rūpa*) を見、聾者が声を聞き、狂人が正気を取戻すなどの功德〔や〕、また他にも、寒い折には暖かくて柔和であること、暑くて苦痛な折には涼しさなど、求め願うようなすべての利益を、意のままになし、そして成就す<sup>68)</sup>るのが決っているのと同様に、多様な三身はすべての有情の利益を意のままに成就され給うので、「如意樹のごとき仏」といわれるのである。

以上のように、仏宝 (*saṅs rgyas dkon mchog, buddha-ratna*) に関して、五義によって説示されたのである。

**B 法宝** 法宝については、四義によって説示される。それはまたなにか。

i) 原因の完備と、ii) 結果の完備と、iii) 本性の完備と、iv) 利他の完備とである。

i 「法界等流 (*chos dbyiṅs rgyu ḥthun, dharma-dhātu-niṣyanda*)」<sup>69)</sup> (3a) と出ていることによって、原因の完備が説示される。そのうち、界 (*dbyiṅs*) というのは、インドの音韻 (*rgya gar gyi sgra*) より引き出せば、*dhātu* と出ている。*dhātu* はチベット語に戻す (*bzlog*) ならば、界 (*dbyiṅs*) と表現されるのであって、界の意味は因 (*rgyu*) の意味である<sup>70)</sup>。また、その界なる因 (*dbyiṅs kyi rgyu*) という意味はなにか<sup>71)</sup>。一切法の法性 (*chos thams cad kyi chos ṅid, dharmāṇām dharmatā*)・空 (*ston pa, sūnya*)・無我 (*bdag med pa, nairātmya*) について〔因〕といわれる。その法性・空がどうして因であるのか。その法性・空・無我を対象として (*dmigs pas*)、それを証悟すること (*rtogs pa*) から、十二分教 (*gsuñ rab yan lag bcu gñis, dvādaśāṅga-pravacana*) などの教法 (*bśad paḥi chos, deśanā-dharma*) と、三十七菩提分法 (*byaṅ chub kyi phyogs kyi chos sum cu rtsa bdun, saptatrimśad-bodhipakṣa-dharma*) などの道法 (*lam gyi chos, mārga-dharma*) と

67) TRSV, P版, 126a<sup>2-7</sup>. ただしこの間に、偈 2cd の解釈に関し別説を挙げる。「あるものはいふ。『色身、というのは一般的説示であり、美しい身体を具備する、というのは受用身である。如意樹のごとし、というのは変化身である。仏、というのは三身を主題とするものである』と。」(126a<sup>5-6</sup>)。

68) P版, “*grub*”, D版, “*brub*”, D版は誤りであろう。

69) TRSV, P版, 126a<sup>7</sup>—b<sup>3</sup>. しかし TRSV は第3偈全体を一群 (*bstan paḥi chos, deśanā-dharma*) として扱っているので以下の註釈箇所と峻別し難い。STsG は、以下の説明で知られるように、偈 3a を原因と結果の観点より分かって、「法界等流」と「十二分教」という二面より考察する。

70) “*ārya-dharma-he:utvād dharma-dhātuḥ / ... hetv-artho hy atra dhātv-arthaḥ /*” (*MAVBh*, Nagao ed., p. 23, l. 23—p. 24, l. 2).

71) D版, “*don de yaṅ gaṅ she na /*”, P版, “*don te / yaṅ gaṅ she na /*”.



[十] 力 (*stobs, bala*)・[四] 無畏 (*mi h̄jigs pa, vaiśāradya*) などの果法<sup>72)</sup> (*h̄bras buhi chos, phala-dharma*) [が生じ], そして要約するならば, あらゆる功德分 (*yon tan gyi phyogs, guṇa-pakṣa*) が生じる基盤 (*gshi*) となるものであるから, 法に関する界あるいは因といわれるのである。

ii 「十二分教」<sup>73)</sup> (3a) と出ていることによって, 結果の完備を説示するのである。契経 (*mdoḥi sde, sūtra*) などの十二分教は, その<sup>74)</sup>法界を証悟したことの等流果 (*rgyu h̄thun paḥi h̄bras bu, niṣyanda-phala*) であるから, 結果の完備が説示されるのである。

iii 「法性は生滅なく戲論を離れたものである」<sup>75)</sup> (3b) というのは, 本性の完備が説示されている。一切法の法性は, もとより (*gzod ma nas*)<sup>76)</sup> 起ることなく生まれることなく, すべての戲論を離れたものであって, そのように真実として不生であるならば, 滅することもまたありえない。生滅について<sup>77)</sup> 常・断 (*rtaḡ chad*), 有・無 (*yod med*) などの戲論のすべての辺より離れた本性であるから, 「法性は生滅なく戲論を離れたものである」ということによって, [本性の完備] が説示されるのである。

iv 「それを対象として, すべての功德が成就する善因 (*legs rgyu*) なる正法 (*dam paḥi chos, saddharma*) に帰依し奉る<sup>78)</sup>」(3cd) と出ていることによって, 利他の完備が説示される。無戲論と説かれる法界と, それを証悟したことから生じた, かの十二分教とを对象として実修したならば, 世間 (*h̄jig rten, laukika*) と出世間 (*h̄jig rten las ḥdas pa, lokottara*) のすべての功德資糧 (*yon tan gyi tshogs, guṇa-sambhāra*) が自然に (*lhun gyis*) 成就するから, 「それを対象として, すべての功德が成就する」のであるが, そのように功德が成就する基盤, もしくは対象と

72) 以上で, 法が教法 (*deśanā-dharma*)・道法 (*mārga-dharma*)・果法 (*phala-dharma*) の三つに区別されていることに注意すべきである。この三区分はいわゆる境・行・果に対応し, 極めて唯識的色彩の濃いものである。

73) TRSV, P版, 126b<sup>3-8</sup>.

74) P版は “*de*” なるも D版は “*te*”. P版をとる。Dに従えば十二分教が法界(因)となるが, 以上の説明により, 十二分教は法界を因とする果(等流果)でなければならぬ。

75) TRSV, P版, 126b<sup>8</sup>—127a<sup>5</sup>. これは, 偈 3b および次の偈 3c を含めて勝義法 (*dam paḥi chos, paramārtha-dharma*) として解す。

76) D版による。P版, “*bzod ma nas*” は誤りであろう。Mvyut. にない用例として注意。

77) D版は “*gyi*” あるも P版はなし。D版による。

78) TRSV, P版, 127a<sup>5-8</sup>. 偈 3c を除いて道法 (*lam gyi chos, mārga-dharma*) で解す。以上でわかるように, TRSV は偈 3a を教法 (*deśanā-dharma*), 3b c を勝義法 (*paramārtha-dharma*), 3d を道法 (*mārga-dharma*) と解釈する。これは STsG と異った解釈であるが, この三区分は STsG 中にも認めうる。前註 72 参照。この場合, 勝義法が果法とみられよう。

なったそれ自体は、すべての善を獲得する原因であるから、それは、すべての善の因となる法に帰依し奉る<sup>79)</sup>と説示されるのである。

以上のように、法宝 (*chos dkon mchog, dharma-ratna*) に関して、四義によって説示されたのである。

**C 僧宝** 僧宝に関しては、五義によって説示される。それはまたなにか。  
i) 原因の完備と、ii) 結果の完備と、iii) 利他の完備と、iv) 自利の完備と、v) 本性の完備とであり、このように五種によって説示される。そのうち、  
i 「煩惱障 (*ñon moñs sgrib, kleśāvaraṇa*) と所知障 (*śes byaḥi sgrib pa, jñeyāvaraṇa*) とを対治することによって<sup>80)</sup>(順次に)」(4a) と出ていることによって、原因の完備が説示される。あらゆる障 (*sgrib pa, āvaraṇa*) を要約するならば、煩惱障と所知障という二つにまとまるのである。そのうち、煩惱障とは、貪 (*ḥdod chags, rāga*)・瞋 (*she sdañ, dveṣa*)・痴 (*gti mug, moha*) などの六煩惱と、二十随煩惱<sup>81)</sup> (*ñe baḥi ñon moñs pa, upakleśa*) についていわれる。所知障とは、不染汚のもの (*ñon moñs pa can ma yin pa, akliṣṭa*) であって<sup>82)</sup>、実質的には (*dños su*)、所執 (*gzuñ ba, grāhya*)・能執 (*ḥdsin pa, grāhaka*) における執着 (*mñon par shen pa, abhiniveśa*) と、五明処 (*rig paḥi gnas lña, pañca-vidyā-sthāna*) などを知らないこととについていわれる。その対治とは、八支聖道 (*ḥphags paḥi lam yan lag brgyad pa, āryāṣṭāṅga-mārga*) などの三十七菩提分法と、無分別の等持<sup>83)</sup> (*rnām par mi rtog paḥi tiñ ñe ḥdsin, nirvikalpa-samādhi*) と、大乘なる不共の中道 (*theg pa chen po thun moñ ma yin paḥi dbu maḥi lam*) と、五明処などの道 (*lam*) 等に関する善巧 (*mkhas pa, kauśalya*) とについていわれる。  
ii 「順次に除去して修行階梯<sup>84)</sup> (*sa, bhūmi*) に入る」<sup>85)</sup> (4b) と出ていることによって、結果の完備が説示される。上述した (*goñ du smos pa*) その対治によって、所治 (*mi mthun paḥi phyogs, vipakṣa*) である煩惱・所知障を、見・修所断 (*mthoñ ba dañ bsgoms pas spañ bar bya ba, darśana-bhāvanā-prahātavya*) の順に断じた結果である修行階梯に入るとは<sup>86)</sup>、菩薩の初歡喜地 (*sa dañ po rab tu*

79) 偈の文そのままではないが、偈句の後半が意識して述べられていると思われる。

80) TRSV, P版, 127a<sup>8</sup>—b<sup>3</sup>.

81) 六煩惱・二十随煩惱は唯識説の心所法の数え方に従っている。

82) “jñeyāvaraṇam api sarvasmin jñeye jñāna-pravṛtti-pratibandha-bhūtam akliṣṭam ajñānam” (*Triṃśikāvijñaptibhāṣya*, p. 15, ll. 9-10).

83) 筆者未詳。前註 46 で触れた「真如の等持」などに相通ずるものがあるのか。

84) TRS の P 版のみ “sañs rgyas sa” とするが他はすべて “sa” のみ。シラブルもあわなくなり、これを採用する理由は全くない。内容的には終局に buddha-bhūmi を想定してもよいように思うが。

85) TRSV, P版, 127b<sup>3</sup>—128a<sup>4</sup>.

86) 以下、述部が長く文脈が辿りにくいが、「結果である入地とは、菩薩の十地と声聞・独覚の七地である」と読むべし。

*dgaḥ ba*, *prathamā bhūmi pramuditā*)・第二離垢地 (*sa gñis pa dri ma med pa*, *dvitīyā bhūmi vimalā*)・第三発光地 (*sa gsum pa ḥod byed pa*, *tṛtīyā bhūmi prabhākari*)・第四焰慧地 (*sa bshi pa ḥod ḥphro ba*, *caturthā bhūmy arcīṣmatī*)・第五難勝地 (*sa lña pa śin tu sbyañ*, *pañcamī bhūmi sudurjayā*)・第六現前地 (*sa drug pa mñon tu gyur pa*, *ṣaṣṭhī bhūmy abhimukhī*)・第七遠行地 (*sa bdun pa riñ du soñ ba*, *saptamī bhūmi dūraṅgamā*)・第八不動地 (*sa brgyad pa mi gyo ba*, *aṣṭamī bhūmy acalā*)・第九善慧地 (*sa dgu pa legs paḥi blo gras*, *navamī bhūmi sādhumatī*)・第十法雲地 (*sa bcu pa chos kyi sprin*, *daśamī bhūmi dharmameghā*), すなわち菩薩の十地と, および聖声聞 (*ḥphags paḥi ñan thos*, *ārya-śrāvaka*) と独覚 (*rañ rgyal ba* = *pratyekabuddha*) の僧伽にして四双の大士八輩<sup>87)</sup> (*skyes bu chen po zuñ bshi gañ zag ya brgyad*) で七地 (*sa bdun*, *sapta-bhūmi*) によって包括されるもの, すなわち淨觀地 (*dkar po rnam par mthoñ baḥi sa*, *śukla-vidarśanā-bhūmi*)・種姓地 (*rīgs kyi sa*, *gotra-bhūmi*)・第八地 (*brgyad paḥi sa*, *aṣṭamaka-bhūmi*)・具見地 (*mthoñ baḥi sa*, *darśana-bhūmi*)・薄地 (*bsrabs paḥi sa*, *tanu-bhūmi*)・離欲地 (*ḥdod chags dañ bral baḥi sa*, *vitarāga-bhūmi*)・已弁地 (*byas pa rtogs pa can gyi sa*, *kṛtāvi-bhūmi*) とである<sup>88)</sup>。このように, 菩薩の十地と, 声聞や独覚の七地と, 断の完備 (*spañs pa phun sum tshogs pa*, *prahāṇa-saṃpad*) や智の完備<sup>89)</sup> (*ye śes phun sum tshogs pa*, *jñāna-saṃpad*) とに順次に入ることが結果の完備なのである。

iii 「有情を利益され給う」<sup>90)</sup>(4c) と出ていることによって, 利他の完備が説示される。順次に修行階梯に入った聖なる僧伽 (*ḥphags paḥi dge ḥdun*, *ārya-saṃgha*) の作業 (*phrin las*, *karman*) とは, 身・語・意 (*sku gsuñ thugs*, *kāya-vāñ-manas*) の手段により (*sgo nas*), 多様な方便 (*thabs*, *upāya*) によって, 有情の利益のみ

87) いわゆる四双八輩。預流・一來・不還・阿羅漢につき四双で, 四向四果に開いて八輩。“*yaḥ saṃghaṃ śaraṇaṃ gacchati śaikṣāśaikṣān asau saṃgha-karakān dharmān gacchati yeṣāṃ lābhenāṣṭau pudgalāḥ saṃghibhavanti /*” (*AKBh*, p. 216, ll. 18-19). ただし, このチベット語にまさに相当するサンスクリットは未確認。

88) 以上七地については, 平川彰『初期大乘仏教の研究』, pp. 352—353 参照。訳語は玄奘訳『大般若』に従った。已弁地に当たるチベット語は *Mvyut*. 所収のものと異なる。なお, この七地を声聞・独覚に共通とみることには問題があるろう。TRSVでは淨觀地・種姓地を欠く五地のみ (127b<sup>5-6</sup>) 列挙され, 続いて別に独覚地と菩薩の十地が挙げられる。すなわち, 五地は独覚に属さず声聞だけのものとみなされたのであろう。

89) 結果を断 (*prahāṇa*) と智 (*jñāna*) でとらえることも極めて唯識的。

90) STsG は偈 4c を利他と自利の両面に分かって考察するが, TRSV は偈 4c 全体を利他を意図するものとみる (*sems can rnam kyi don ni dgoñs pa ste*)。従って偈 4c 全体につき TRSV, P 版, 128a<sup>4-7</sup>。

をなし給うことであって、これこそ利他の完備なのである。

iv 「仏国 (*sañs rgyas shiñ*, *buddha-kṣetra*) を清める (*sbyoñ ba*)<sup>91)</sup>」(4c) と出ていることによって、自利の完備が説示される。かくして、仏国は二種であって、外的環境世界 (*phyi snod kyī h̄jig rten*, *bāhya-bhājana-loka*) と内的本質世界<sup>92)</sup> (*nañ bcud kyī h̄jig rten*) との二つである。それらを清めるとは、[以下のごとくである]。

a 外的環境世界は、峡谷 (*ñam grog*) や木の枯れた場所 (*sdom dum*)<sup>93)</sup> や瘦地 (*tsha sgo can*) などであって、[そういった] 浄らかでないもの (*ma dag pa*) を、金などの種々の宝や安楽を有するもの、あるいは蓮華を有するものなどの種々の功德を具備したものとなるように完成せしめることが、外的環境世界である仏国を清めることなのである。

b 内的本質世界は、五種の衆生<sup>94)</sup> (*h̄gro ba ris lña*) によって包含される。[その五種それぞれにつき]、苦悩する有情たちを安楽に移し、十不善 (*mi dge ba bcu*, *daśākuśala*) に住するものたちを十善に移し、散乱したものたちを禅定 (*bsam gtan*, *dhyāna*) と等至 (*sñom par h̄jug pa*, *samāpatti*) とに移し、輪廻するものたちを聖道 (*h̄phags pañi lam*, *ārya-mārga*) と三菩提<sup>95)</sup> (*byañ chub gsum*, *bodhi-traya*) たる結果とに移すようにして、そして自心相續 (*rañ sems rgyud*, *sva-citta-saṃtāna*) を清めるのである。

なぜ仏国を清めるといわれるのか。それは、自己および他人の相續を清めたことにより、仏として成就し、あるいは[仏として] 生じるから、仏国といわれるのである。たとえば、畑 (*shiñ*) より大麦 (*nas*) が生じた[のを大麦畑という] ように。

この箇所 (*skabs*) では、また主として (*gtsor*)、自心 (*rañ gi sems*, *sva-citta*) を清めたことについて「仏国が」いわれる。自心を清めたことは、また利他をなしたことによって成就するのである。

v 「聖なる大僧伽 (*dge h̄dun che*, *mahā-saṃgha*)」<sup>96)</sup>(4d) といわれることによっ

91) STsG は仏国を清めることを、自己自身の心のうちでとらえるからそれを自利として扱ったのであろう。以下の説明中「主として (*gtsor*)」自心相續を清めることと解されていることに注意。

92) 前註 59 参照。“*bcud*” を使用するのには、仏国を清めることを特に自心相續において強調することと関係があるのか。

93) 蔵文辞典には樹木の断片等の意味があるが筆者未詳。

94) 五種の衆生と訳したのは前註 65 の場合と同じか、あるいは異なるか不明。ここでは、内的本質世界としての「五種の衆生」を、以下の説明中の①苦悩する有情たち、②十不善に住するものたち、③散乱したものたち、④輪廻するものたち、⑤自心相續と考えてみたい気もするが、⑤が落ちつかない。

95) 声聞・独覚・菩薩の菩提のことと思われる。

96) TRSV, P 版, 128a<sup>7</sup>—b<sup>1</sup>.

て、本性の完備が説示される。このように、すべての聖なる僧伽の本性とは<sup>97)</sup>、原因である業 (*las, karman*) や煩惱 (*ñon moñs pa, kleśa*) と、結果である三もしくは八の苦<sup>98)</sup> (*sdug bśnal, duḥkha*) など、輪廻のすべての罪悪 (*ñes paḥi skyon*) より超克したもの (= 聖なるもの, *ḥphags pa*) であるが、このような多くの聖なるもの (*ḥphags pa*) が集ったこと (*ḥdus pa*)<sup>99)</sup> について「僧伽 (*dge ḥdun, saṃgha*)」といわれる。「大 (*che*)」と出ている〔その意味〕はまた二つある。それはまたなにか。偉大な威力 (*mthu che ba*) と多大な数 (*grañs mañ ba*) とによって「大」なのである。そのうち、偉大な威力とは、煩惱障と所知障などのすべての敵 (*dgra*) を破ったこと、および天魔 (*lhaḥi buḥi bdud, devaputra-māra*) などすべての四魔<sup>100)</sup> (*bdud bshi, catur-māra*) の群によって害されずに聖なることをなさることによって、偉大な威力なのである。〔また僧伽には弟子衆が〕千二百人など多くいらっしやるので、数について多大なのである。このようなものが僧伽の本性である。

以上のように、僧宝 (*dge ḥdun dkon mchog, saṃgha-ratna*) に関して、五義によって説示されたのである。

**D 総結**<sup>101)</sup> 以上のように、三宝 (*dkon mchog gsum, ratna-traya*) の特質 (*mtshan ñid, lakṣaṇa*) と功德 (*yon tan, guṇa*) とを対象として、清らかな心 (*sems dad pa*) と大いなる願 (*mos pa chen po*) をもって帰依するならば<sup>102)</sup>、二障 (*sgrib pa gñis, āvaraṇa-dvaya*) を清めて、三種の結果<sup>103)</sup> を獲得するであろう。

最勝なる仏に関する註である詳解、チベットの翻訳官 *Shañ Ye śes sde* の著作完了

(1976年12月10日)

#### 補 遺

本稿脱稿後ほどなく、*TRS* に関する新たな資料を発見したので報告しておきたい。発見の切掛は、本学大学院博士課程在学の上杉隆英氏が、拙稿「〈清浄法界〉考」に対する私信 (1976年12月23日付) にて、筆者が問題とした \**Buddhabhūmisamādhiṭikā* に関連する情報を知らせて下さったお蔭である。その幾分は、本稿註33において言及ずみの事項と重複する面もあったが、なによりも有難かったのは、*Poussin cat. Nos. 281, 301* の

97) P版, “*ni*”. D版, “*na*”.

98) 三苦は行苦・壊苦・苦苦, 八苦は生・死・病・死・怨憎会苦・愛別離苦・求不得苦・五陰盛苦のことと思われる。

99) D版による。P版, “*ḥdul ba*” は恐らく誤り。

100) “*tatra catvāro mārāḥ / tadyathā skandha-mārāḥ kleśa-mārāḥ maraṇa-mārāḥ devaputra-mārāś ca /*” (*Śrāvakabhūmi*, Shukla ed., p. 344, ll, 2-4).

101) この総結に対応する *TRSV* はP版, 128b<sup>1-6</sup>.

102) D版, “*na*”. P版, “*nas*”.

103) 前註95の場合に同じか。

指摘と共に、同目録の当該箇所をコピーで送付下されたことである。脱稿間もない筆者としては、その No. 281 下の記載をみて即座にそれが TRS と全同のものであると気づいたのは至極当然のことで、労は全て氏の上にある。記して深謝の念を表したい。

No. 281 に関する同目録の記載は、わずか一葉の写本の報告としては詳しく、転写も大半が果されており、ここで殊更付け加えるべきことはない<sup>a)</sup>。新たに分ったことは、そこに転写されている4偈が TRS のそれにほかならないということ<sup>b)</sup>のみである<sup>c)</sup>。しかし、TRS が敦煌写本中に発見されたことにより、その資料的価値が補強され、さらにその行間に施された割註の内容いかんにより、STsG に対して異った角度から照明を当てることも可能であろう。ただ遺憾ながら、その行間は、東大東西文化交流施設の好意により入手した焼付コピーからは判読困難であり、解読のためにはなんらかの機械的操作が必要であるが、時久しくして雑用のため等閑に付している。今は、現写本を直視しえた Poussin の転写により、その箇所のみを和訳で紹介するに止める。

「[二つの偉大な資糧が完成する]とは、]原因の完備であって、福德と智慧の[二]資糧である。

結果の完備とは、すなわち四智と三身である。そのうち、三身はまた智を本質とするものにほかならない。<sup>\*</sup> *Buddhabhūmiṭikā*によれば、「大円鏡智は法身、平等性智と妙観察智<sup>d)</sup>とは受用身、成所作智は變化身」と出ており、[それらは]、仏の昔の願力と、清浄な有情界の因縁により、そのように現われるのである。

「原因の完備」および「結果の完備」という用例は TRSV よりも STsG からの影響が濃いとみなしうるが、これだけでは決め手にはならない。他の三つの「完備」も、今判読できぬ箇所ではいわれているならば、この推測もあるいは強い論拠を得ることができるかもしれない<sup>e)</sup>。いずれにせよ、詳細な検討は今後に俟ちたい。

なお本稿では、TRS が *Mātṛceṭa*<sup>f)</sup> の真作かどうかについてはなんの考慮も払っていない。もし真作ならば、「煩惱障」「所知障」など、唯識的用語の淵源がかなり古くまで遡れることになるが、これはむしろインド仏教史の問題である。真作と決定するためには、他の論証が必要であろう。(1977年4月1日、初校ゲラ校正の日付記)

---

a) Poussin, *Catalogue of the Tibetan Manuscripts from Tun-Huang in the India Office Library*, (1962), pp. 94—95.

b) 4偈の原文を提示すべきであるが、今は、上掲目録中の転写を参照されることを願って詳細な比較は省略す。大きな違いは、第1偈の4句全てに“*gus par*”が挿入されている点。従って、TRS, STsG の7シラブルに比して、写本は9シラブルから成る。なお、本稿註25で指摘した偈3 aに注目すると、“*chos dbyiṅs*”が使用されており、この点で TRS よりもむしろ STsG に近い系統にあるといえる。

c) 従って、この写本は、Poussin が参照する *Ratna-traya-maṅgala-gāthā* (=P版, No. 4599) とは直接の関係はない。

d) “*dnos por rtog pa*”とあるが、恐らくは“*dañ so sor rtog pa*”とあったのを転写し違えたのではないかと思われる。

e) 本稿註34参照。

f) *Mātṛceṭa* については、さらに、金倉円照『馬鳴の研究』, pp. 92—116, 辻直四郎『サンスクリット文学史』, pp. 17—20参照。本稿註28が安易になされたことを恥じる。